

特別寄稿

台北大阪高等教育シンポジウムに参加して

Reports of the second international symposium on the higher education in Japan and Taiwan held in Taipei on October 18th in 2013 under the auspices of the consortium of the universities in Osaka and Taipei.

大阪河崎リハビリテーション大学 学長

山田 龍作

I. 大学コンソーシアム大阪と日台高等教育シンポジウム

特定非営利活動法人大学コンソーシアム大阪は国際学術交流事業として平成20年4月に台湾財団法人高等教育国際合作基金会と協力協定を締結し、その事業の一環として、平成23年8月に大阪で第1回日台高等教育シンポジウムが開催された。今回は本学も学長、山田龍作がこれに参加し、台北医科大学への新善訪問、台北大阪高等教育シンポジウムで“国際創意開発人材の育成”をテーマに講演を行った。

II. 台北医科大学、国立台北科技大学、東呉大学への事前親善訪問

まず、シンポジウムの前日、10月17日、台北到着後直ぐに、我々は3班に分かれて台北医科大学、国立台北科技大学、東呉大学の3つの大学に表敬訪問を行った。

第一班は大阪医科大学竹中 洋学長、大阪河

崎リハビリテーション大学山田龍作学長、関西福祉科学大学江端源治学長、大学コンソーシアム大阪三宅 努事務局長の4名で、台北医科大学を訪れた。まず、国際交流センター長の出迎えをうけ、大学の案内と説明、丁寧なお持てなしを受けた。その後、学長室に案内され、閻 雲学長から直々に、台湾での医学教育全般と同学の医学教育レベルの高さについて、国際的認証基準を基に説明を受け、我々も各々自分の大学について説明し、意見の交換を行った。その後、記念品の贈呈交換を行ないお礼を述べ、行事を終えた。我々の大学からは、Campus Guideと大学名入りのジャージを持参した。なを、これらの行事や説明及び会話は全て英語で行われ、台湾の大学の医学教育が明らかにAmerican-standardを目指して行われている事に強い印象を受けた。この大学は私立大学であるにも関わらず、医学部学生の授業料は年間約5000米ドル(約50万円)と日米欧に比べて明らかに安価であるにもかかわらず、充実した附属病院の設備や研究施設があり、各学部に大学院を設置している事など、強く印象に残った。更に、歯学部、薬学部、看護学部、公衆衛生学部、医療工学部、人間科学部など、計8学部在

り、6000名の学生が在籍していて、活気あるキャンパスを形成していた。我々の大学の今後目指すべき将来像を目の辺りにしている様に感じられ、大いに触発された。



図1. 台北医科大学

Ⅲ. 2013年、第2回 台北大阪高等教育シンポジウムのプログラム

日時：2013年10月18日 9：30 - 17：30

場所：台北市、淡江大学、淡水キャンパス、
覺生国際会議庁



図2. 淡江大学 淡水キャンパス

シンポジウムは10月18日午前9時から台湾最大の私立大学であり、学生数3万5千を誇る淡江大学の淡水キャンパス、覺生国際庁の10階会議場で開催された。そのプログラムは表1

に示す如くである。

午前10時より、台湾教育省政務次長官 黄碧端氏の歓迎の挨拶に始まり、次いで、このシンポジウムの台湾側主催者 財団法人高等教育国際合作基金会理事長の張家宣氏（淡江大学学長）、日本側代表、大学コンソーシアム大阪の理事長井上正宗氏（大阪工業大学学長）の挨拶があった後、記念品交換が行われた。本学からは、大阪河崎リハビリテーション大学名入りのジャージを贈った。

10時35分より基調講演として教育省の女性官僚の邱玉檐氏の1時間に及ぶ滔々とした演説があった。その内容は、台湾に於ける経済成長とその減速、それに伴う諸問題、とくに高等教育面での課題について述べられた。人口の減少、少子高齢化、経済や教育のグローバル化、ITの発達、普及等、わが国と共通する事柄が多く、このシンポジウム開催の意義を納得させる内容であった。

分科会（1） 大学生の国際移動力を高める術

日台ともに最近の大学生は内向きで、外国に留学すると云う意欲に乏しく、大学はグローバル人材の育成が求められている現状に十分応えられていないと云う指摘があり、またその為には、外国からの留学生も増やす必要がある。大学生の国際移動力を如何にして高めるかについて淡江大学ではどのような取り組みを行っているか、副学長の容継業氏と大阪教育大学学長の長尾彰夫氏が各々の大学での取り組みについて講演し、感銘を与えた。

分科会（2） ハイテクとエコキャンパス

国立台北科技大学建築学科、大学院建築都市設計研究科教授 蔡仁惠氏が自分の大学で実践しているハイテクとエコキャンパス計画の実際に就いて紹介し、注目を集めた。その内容は、大学のキャンパスの緑化を進め、同時に再生可能エネルギーの利用を促進するもので、実例を示して講演し、大方の強い関心を集めた。筆者

表1 2013年第2回台北大阪高等教育シンポジウムの当日スケジュール

| 時間 | 内容 |
|-------------|---|
| 09:30-10:00 | 受付 |
| 10:00-10:30 | 貴賓挨拶 教育省政務次長官 黄 碧端 (招聘中) 財団法人高等教育国際合作基金会 理事長 張 家宜 大学コンソーシアム大阪 理事長 井上 正崇 |
| 10:30-10:35 | 記念品交換 (教育部、FICHET、大学コンソーシアム大阪) |
| 10:35-11:30 | 基調講演 コーディネーター：財団法人高等教育国際合作基金会 理事長 張 家宜 演講者：教育省国際及び两岸教育司 代理司長 邱 玉蟾 |
| 11:30-11:40 | 記念写真 |
| 11:40-12:40 | 交流昼食会 ※井上理事長・三宅事務局長 →張理事長・教育部担当者と2015 (H27) 年度の交流事業の打ち合わせも兼ねる |
| 12:40-13:35 | 分科会 (一)：大学生の国際移動力を高める術 コーディネーター：国立高雄餐旅大学 学長 容 継業 発表者 台湾側：淡江大学 副学長 戴 萬欽 日本側：大阪教育大学 学長 長尾 彰夫 |
| 13:35-13:40 | Q&A |
| 13:40-14:35 | 分科会 (二)：ハイテクとエコキャンパス コーディネーター：国立雲林科技大学 学長 侯 春看 発表者 台湾側：国立台北科技大学建築学科・大学院建築都市設計研究科 教授 蔡 仁惠 日本側：大阪女学院大学 学長 加藤 映子 |
| 14:35-14:40 | Q&A |
| 14:40-15:10 | ティータイム |
| 15:10-16:05 | 分科会 (三)：大学における学校管理と経営の術 コーディネーター：大阪医科大学 学長 竹中 洋 発表者 台湾側：台北医科大学学長 閻 雲 日本側：大阪商業大学 学長 谷岡 一郎 |
| 16:05-16:10 | Q&A |
| 16:10-17:05 | 分科会 (四)：国際創意開発人材を育てる コーディネーター：関西大学 学長補・ 外国語学部教授 山本 英一 発表者 台湾側：実践大学学長 陳 振貴 日本側：大阪河崎リハビリテーション大学 学長 山田 龍作 |
| 17:05-17:10 | Q&A |
| 17:10-17:30 | 閉会挨拶 台湾側：財団法人高等教育国際合作基金会 理事長 張 家宜 日本側：大学コンソーシアム大阪 理事長 井上 正崇 |

も、福島第一原発事故を念頭に、また、エコロジーの観点から、原子力発電の在り方について質問し意見の交換を行った（英語で）。

次いで、大阪女学院大学学長の加藤映子氏の講演は、大学教育のICT化に就いて、自学で実施経験を基にして、その可能性と有用性についてのべた。そのPPTは全て英語表記であり、プレゼンテーションも英語で行う予定であったとの事で、高等教育のグローバル化の方向性に示唆を与えるものであった。なを、加藤氏は大阪女学院大学を卒業し、フルブライト留学生試験に合格し、ハーバード大学教育学部及び大学院を卒業すると云う学歴を有し、若くして母校の学長に就任されたという経歴も在り、その講演は大いに関心を集めた。

分科会（3） 大学に於ける学校管理と経営の術

このセッションは大阪医大学長の竹中 洋氏の司会の下で、発表が行われた。演者は、昨日訪問した台北医科大学学長の閻 雲氏と大阪商業大学学長の谷岡一郎氏により行はれた。少子高齢化時代における大学運営について、それぞれの大学での成功体験を基に興味深い発表がなされ、大いに参考になった。しかし、日台に共通する少子高齢化、人口減少、学生数の減少に対する根本的な対策については十分な論議は成されなかった。

分科会（4） 国際的創意開発人材を育てる

国際的に求められる、グローバルに活躍が期待できる、創意開発能力に富む人材を育てる為には、大学はどのような教育、取り組みを行うべきかと云う、大変難しい問題を論ずるセッションである。

台湾側は実践大学学長の陳 振貴氏が講演を行い、日本側の演者は大阪河崎リハビリテーション大学学長の山田龍作（本報告書の執筆者）が台湾側の指名により担当する事になった。その内容は単に本学や筆者自身の経験だけに止ま

らず、広く世界に目を向け、温故知新、歴史に学び、近代、現代の成功事例を調査研究し、その結果と自己の経験と成功体験を結び付けて論述された。

IV. 国際的創意開発人材を育てる：Development of globally innovative and creative human resources：大阪河崎リハビリテーション大学学長 山田龍作の講演



図3. 講演の様子

世界的に産業、経済、文化を発展させ、社会を牽引するイノベーションは科学技術上の画期的な発明や発見を端緒として齎される事が少なくない。現代における電子工学、コンピューター、IT技術の進歩、発達などはその好例である。従って、わが国では、中央教育審議会の答申(平成25年4月25日)や教育再生実行会議：第3次提言(平成25年5月28日)に於いても、これからの大学教育の在り方として、イノベーションの創出のための教育、研究環境の整備、国際的に活躍できるグローバル人材の育成などが重要課題として強調されている。内閣はこれ等の答申や提言を受けて、大学の機能強化を国家戦略として実行し、平成29年(2017年)までの5年間を大学改革実行集中期間と位置付けるとしている。国際的創意開発人材の育成は日台両国に止まらず国際的な重要課題である。本

学は創立後16年目の若い大学であるがこれから述べる様な方向に向けて努力している所である。

(1) 国際創意開発人材育成モデルの研究

現代のIT技術の発展と普及は世界中の産業、経済や文化に大きな変化を与えつつあるが、その中心は米国カリフォルニア州、San Francisco市郊外南東、Palo Alto 地区にある Stanford 大学（米国、カリフォルニア州）である。その周辺地域が多くの先端産業の企業群が発達し、世界有数の工業地帯を形成し、シリコンバレイと呼ばれている事はよく知られている。これはまさに Stanford 大学の研究開発の成果がスピアウトし工業化され、多くの企業が生まれ、先端産業の工業地帯を形成したわけである。同大学の国際創意開発人材の育成の成果である。その成り立ちと仕組みを研究することは重要であり、その概要を図4に示す。これ等のIT産業や企業の多くは、Stanford 大学の学生や大学院

生、研究者等により創業された事は国際的に広く知られている。また、筆者自身も Steve Jobs氏が Apple 社を Palo Alto 地区に創業した1976年に米国西岸のオレゴン健康科学大学に留学中であり、其の当時のカリフォルニアのIT開発の熱気を感じる事が出来た。その経験が大いにその後の自身の医学研究と医療技術開発に役立ったと考えている。また、2000年代に入って、インターネット検索大手企業の Yahoo は台湾から留学し数年目の、Stanford 大学院生の Jerry Yang 等により工業創業された事は、本シンポジウムが台北市で開催されている点からも特筆しておきたい。

(2) 次に最近の研究事例として、2012年にiPS細胞の開発によりノーベル医学・生理学賞を受賞された 山中伸弥京都大学教授はその業績と其の可能性の偉大さから、まさに国際創意開発人材のモデルとさせて頂くのに最もふさわ

図4



Stanford University

スタンフォード大学発の多数のVenture Businessが企業化され、大学を中心とする世界的なIT産業工業地帯に発展し、米国経済、文化、世界の産業・経済を牽引している。

しい研究の対象と考えられる。その為、山中氏が大阪府出身で、1987年に神戸大学医学部を卒業し、1993年大学コンソーシアム大阪の一員である大阪市立大学の大学院医学研究科博士課程を修了し、米国カリフォルニア州サンフランシスコに在る Gladstone 研究所に留学し、大阪市立大学医学部教員、奈良先端科学技術大学院遺伝子教育研究センター教授を経て、京都大学再生医科学研究所教授、iPS細胞の創意開発により、ノーベル賞を受賞、現在、京都大学iPS細胞研究所長を務められる経歴を紹介した。

山中教授のiPS細胞の研究成果が再生医療、臓器移植の分野だけでなく色々な難病の治療、創薬の分野にも貢献しうる、人類の未来をも変え得る可能性のある現在進行形のモデルである事を示した。そして、iPS細胞研究の端緒は、San Francisco市にあるGladstone研究所留学中に始まったとあり、やはり南カリフォルニアの研究環境に触発された所が大きかった。iPS細胞のiは当時普及し始めたiMac,iPad,iPodにあやかって名付けられたともいう。その正式英語名は induced pluripotent stem cell であるが。

(3) 創意開発が成功裏に行われる為には、新しい発見や発明を知的財産として所有権の取得や管理、運用が適切に行われねばならない。それが確実でなければ、折角のアイデアも育てて結実させることは困難である。所有権の確立されていないアイデアに研究開発費が投資される事は望めないからである。これは著者自身

の幾つかの治療法や医療技術開発の経験からも云い得ることである。即ち知的財産に就いての正しい認識と管理に就いて知識を教育することは国際創意開発人材の育成には欠かせない条件であると云える。

IV. 国際創意開発人材の育成法のまとめ

科学技術の進歩が社会のイノベーションを牽引することは、歴史的にもしばしば認められる事実である。この様な進歩を創出するためには大学等の高等教育機関において、グローバルに活躍できる創意開発人材の育成が重要である。日本政府においても中央教育審議会の答申や閣下の教育再生実行会議の提言でも、大学教育で創意開発の出来る、グローバル人材の育成の重要性が盛んに述べられている。その顕著な例として、Stanford大学とシリコンバレイでのIT技術開発と産業発達の経過が研究され、山中伸弥教授のiPS細胞の研究と開発もこの観点から検討された。その結果、科学技術研究に強い動機と関心を持ち、国際的コミュニケーション能力(語学能力)を身につけた人材を育てるには何が大切であるか。とりわけ、科学研究やIT技術開発などで世界的先端をゆく様な大学や研究機関に留学し身を置くか、または、そのような先端産業地域で仕事に従事する事が重要であると考えられた。本学、大阪河崎リハビリテーション大学に於いても今後この様な方向に教育の充実を図ってゆきたいと考える。